

派遣者番号	R3K14	氏名	我妻 夢子
研究主題 —副主題—	「主体的な学び」を生む小学校国語科における授業づくり		
派遣先	東京学芸大学 教職大学院	担当教官	中村 和弘
所属	文京区立本郷小学校	所属長	溝畑 直樹

キーワード：主体的な学び 協働的な学び 小学校国語科

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

現在、情報化やグローバル化といった社会的変化が著しく進展し、社会構造や雇用環境の変化など、複雑で将来の予測が困難な時代が来ると言われている。中央教育審議会答申では、これからの社会を生きる子供たちは、様々な課題に対応しながら主体的に社会と関わっていく力が必要であると述べられている。

また、OECDの提唱するEducation2030では、子供たちがこれからの人生を形作り、共に生きる他者の人生に貢献していくためには、様々な課題に対して柔軟に対応しながら、主体的に社会と関わっていく力が必要であると述べられており、主体的な学びの重要性が伺える。

しかし、学校現場では、児童の主体的な学びの姿を的確に捉えきれず、指導方法についても十分に検討されていないという現状がある。そこで、本研究では児童の主体的な学びの姿、特に国語科授業において、どのような姿が見られるのかを明らかにするとともに、国語科の授業作りにおいてどのような手だてが児童の主体的な学びに有効であるか検討することを目的とする。

2 研究の方法

- (1) 調査対象：都内公立小学校第6学年児童33人
- (2) 実施時期：令和3年10月
- (3) 教材：『やまなし』『イーハトーヴの夢』（光村図書6年）
- (4) 検証授業の具体的な手だて

ア 課題設定の工夫

松本・西田(2020)の提唱する「問いの5つの要件」を参考とし、単元における学習課題が「質の高い問い」となるようにした。「質の高い問い」は、児童が自ら探究しようとする主体的な学びへとつながる。また、単元の導入では題名に着目することで、児童の疑問や興味・関心、好奇心といった内発的学習意欲を高められるよう工夫した。

イ 学習形態の工夫

ペアやグループ等を主とした学習形態での

授業を行った。児童同士の学び合いの場を基本とした「課題解決グループ」と「ジグソーグループ」の二つのグループを活用した。それぞれのグループの友達と交流しながら読み深めていくという形態で授業を展開することにより、児童一人一人の学びに責任が生じることとなる。グループ学習におけるフリーライダーをなくし、試行錯誤しながら自らの学びを調整できる環境を作った。

ウ 学習方略の工夫

学習方略の工夫として「学びのためのツールの選択」「課題へのアプローチの選択」「『エデュスクラム』の活用」を行った。自分たちの思考を整理するのに適した学習方略を選び、課題解決に向けて見通しをもち、学習を調整するとともに、すすんで学習に取り組める場の設定をした。

エ 振り返りの充実

質の高い振り返りが行えるよう、振り返りの視点を明確にして児童に提示した。振り返りの視点は、各項目を「国語科の授業の学びに関する視点」と「本研究の主体的に学習に取り組む態度に関する視点」の二つに整理して示した。

また、グループでの振り返りと一人での振り返りの両方を活用し、授業の始めには、前回の振り返りを基に本時のめあてを決めるようにした。グループでの振り返りと個人での振り返りを効果的に行うことで、自己の学びをメタ的に捉え、新たな目標を設定することができるようにした。

(4) 分析の方法

授業後に自由記述によるアンケートを実施し、児童の記述を分析した。

アンケート分析は、第一段階として、実際に授業を行った筆者自身が授業中の児童の様子を踏まえた上で、本研究の主体的な学びの姿である「見通しをもちながら、自ら解決に向かう姿」、「粘り強く、課題に向かう姿」、「学びを振り返って、次の学習につなげる姿」の3観点に分類した。

第二段階として、分類した三つの姿の中から見

えてきた、より具体的な児童の姿を更に細かく分類し、児童の主体的な学びの姿を明らかにした。細分化するにあたっては、本大学院の同僚と共に分類することで、その妥当性を保つこととした。

3 研究の結果

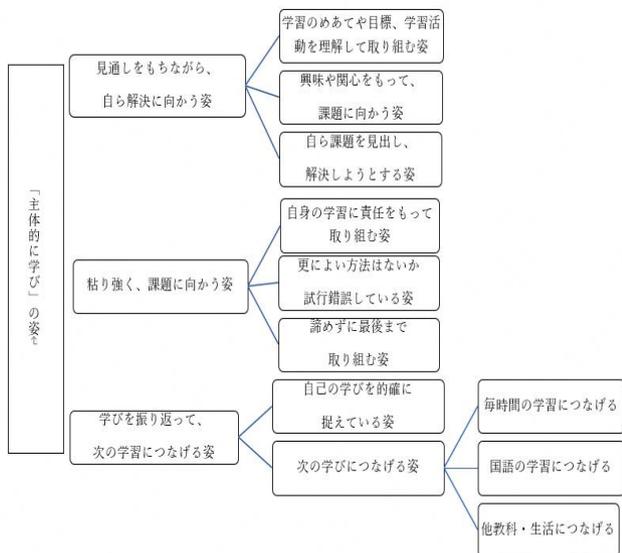


図1 主体的な学びの姿一覧

分析した結果、「主体的な学びの姿」は図1のように分類することができ、「見通しをもちながら、自ら解決に向かう姿」「粘り強く、課題に向かう姿」については3パターン、「学びを振り返って、次の学習につなげる姿」については2パターンの児童の姿が見られた。その中でも「次の学びにつなげる姿」については「何につなげていきたいか」という視点で見ると、さらに3つの姿に細分化することができた。

また、「課題設定の工夫」「学習形態の工夫」「学習方略の工夫」「振り返りの充実」といった今回講じた手だてが、主体的な学びを生むための要因となっていることが児童の記述から見取れた。

4 研究の考察

今回検証授業を行う中で見えてきた児童の姿を本研究における「主体的な学びの姿」の定義に沿って分析することにより、国語科における児童の主体的な学びの姿の一部を明らかにすることができた。また、今回講じた手だてに対しては、児童が有用性を感じて積極的に活用していることから、四つの手だては主体的な学びを生むのに一定の効果があったと言える。

中でも「学習形態の工夫」でペアやグループなど様々な形態で協働的な学びを行ったことにより、学習の深まりや学びの充実を感じる児童が多かったということが児童の記述からも見取れた。こうした協働的な学びは児童の内発的動機付けとなるプラ

スの感情を高めることにも寄与し、児童の主体的な学びにつながりやすいという点で大きな効果があったと言える。

また、主体的な学びの姿を具体化し、その手だての効果を検証することにより、教員が明確な目的や方略をもって授業を改善することが可能となった。図1の姿を参考に、年間を通して系統的に児童の主体的な学びを育成することができると考える。

課題については二点挙げられる。

第一に、協働的な学び合いの場で適切な学習方略を児童が自分で選択できるようになるには、継続的な指導が必要だということである。教員は、子供たちがどのような方略を活用し、どのように課題解決ができたのかを自覚できるように、また、その方略を使った良さを児童が実感できるようにすることが大切となる。そして、失敗や成功を繰り返しながら学習経験を積むことで、児童が学んだ方略を使いこなせるようになっていくことが重要である。

第二に、振り返りの充実と活動のバランスを考え、指導していくということである。今回行った記述による振り返りは、児童の主体的な学びに一定の効果はあったが、振り返りを丁寧に行うことで国語本来の活動時間が短くなってしまいう課題が残った。教員は、年間を通して継続的に指導していくことで、まずは児童が振り返りを書き慣れていけるようにすることが大切である。また、教科としての資質・能力の向上を図ることと児童の主体性を伸ばすことのバランスを考えて授業をデザインしていくことが重要である。

5 今後の展望

本研究の目的である児童の「主体的な学びの姿」を改めて捉え直したり、国語科の授業作りにおいてどのような手だてが児童の「主体的な学び」に有効であるかについて検討したりすることができた。しかし、今回は第6学年一クラスという限られた中での検証となったため、今後量的にも更にデータを集めて検証していくことで、より具体的な児童の姿を捉えることができると考える。

また、国語科における「主体的な学び」として捉える時、「読むこと」領域の他の教材においても検討の幅を広げたり、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「言語」などの領域においてもどのような主体的な学びを生む授業が展開できたりするか検討していく必要があると考える。